

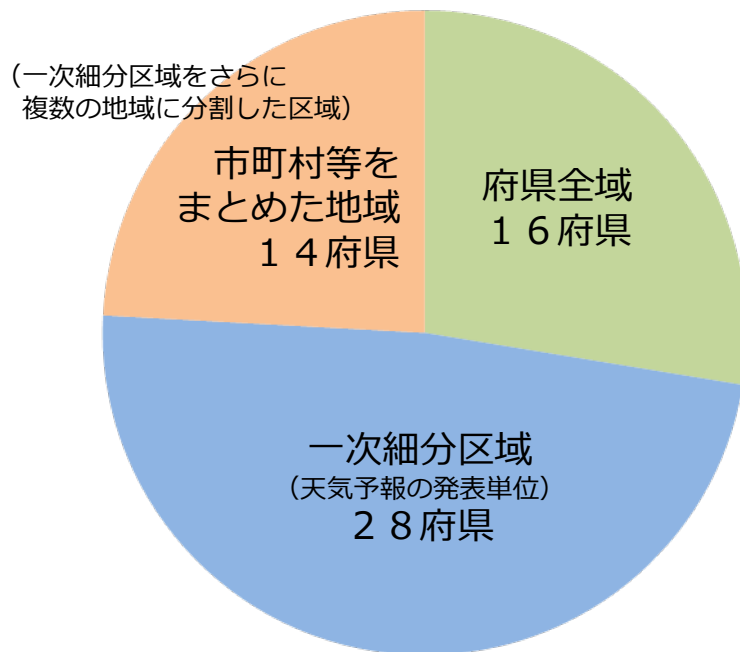
火災気象通報の現状等

火災気象通報を行う基準例（東京地方）

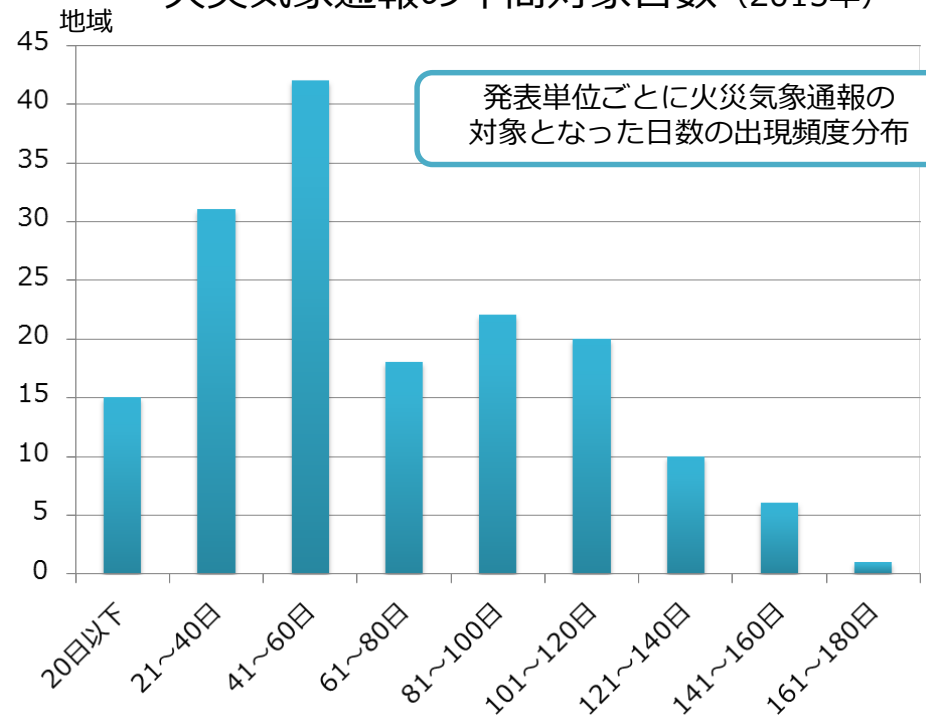
- ①実効湿度※が50%以下で、最小湿度25%以下になると予想されるとき
- ②平均風速が13メートル以上吹くと予想されるとき（降雨、降雪中は通報しないことがある）
- ③実効湿度が60%以下で、最小湿度30%以下となり、平均風速10メートル以上吹くと予想されるとき

※木材の乾燥の程度を表す指数で、数日前からの湿度を考慮に入れて計算する。実効湿度が50～60%以下になると火災の危険性が高まる。

火災気象通報の発表区域の単位



火災気象通報の年間対象日数（2015年）

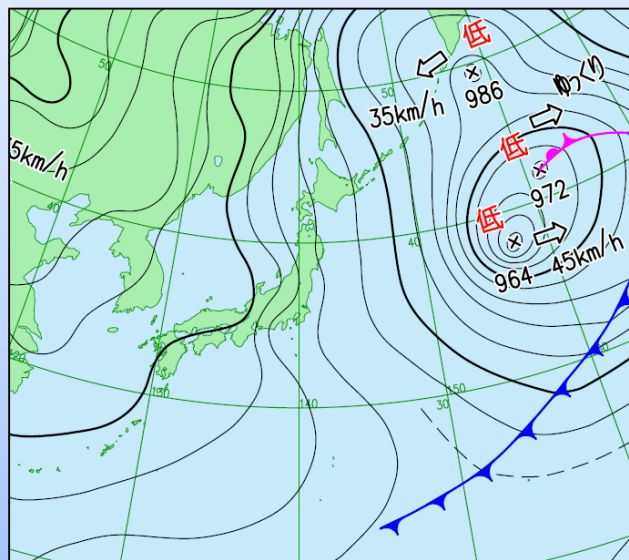


火災気象通報の発表区域の分割の検討

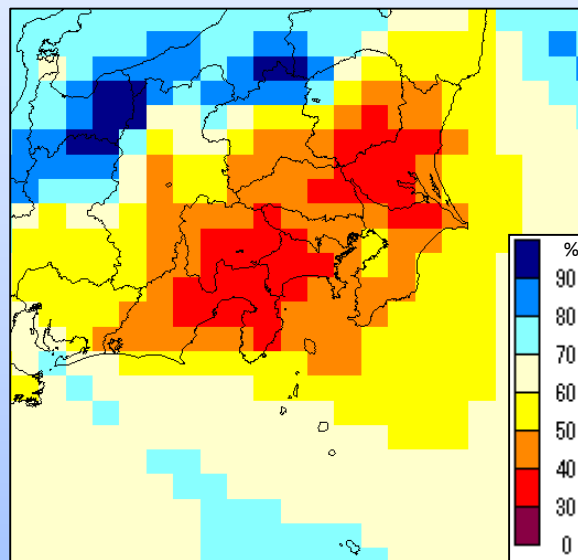
湿度や風は微細な地形により大きく影響を受けるが、気象庁では予測精度等を踏まえ

- 気圧配置により変化するような一定程度の広がりをもった現象を対象として
- 特性が類似する地域単位（天気予報の発表単位程度）で予測を行っている

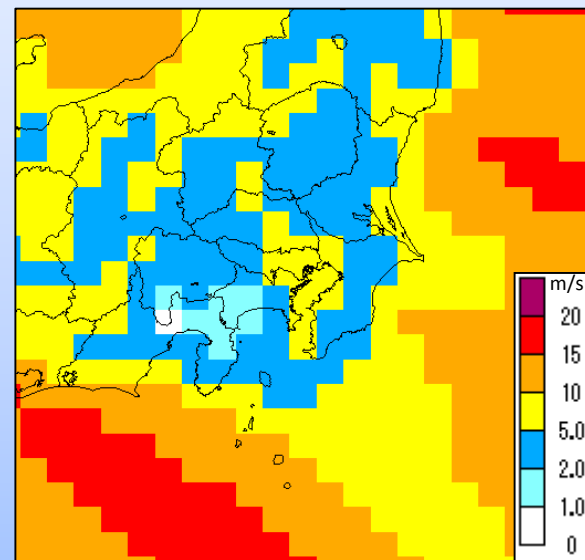
2017年2月7日15時の天気図



湿度の分布



風速の分布



- 天気予報の発表単位(〇〇県北部など)程度※に分割することは可能
- 火災気象通報を受けた市町村等が取る対応を踏まえて、通報の運用（発表区域、基準等）のあり方について検討する必要がある

※都道府県によって特性等が異なるため、どの程度細分可能かは個別に検討が必要